

# 図書館学とビブリオテコノミー

—ドイツ図書館学思想の変遷—

小 倉 親 雄

1

ドイツにおいて“図書館学”の語が一応の定着をみ、その思想形成が一段落を遂げた19世紀の前半を終ろうとするとき、その前半期に対する総括的な役割を果たしているツォラー(Edmund Zoller, 1822—1902)は、このような形成の過程を振り返りながら、その起原をさらにさかのぼってたずね、フランスのノーデ(Gabriel Naudé, 1600—1653)を“図書館学の建設者”として位置づけ、さらにイギリスのリチャード・ド・ベリー(Richard de Bury, 1287—1345)をもって“ビブリオテコノミー”(Bibliothekonomie)に対する最初の基礎づけを行なった人としての評価を加えている<sup>1)</sup>。

ノーデは“図書館建設のための意見書”(1627)の、またド・ベリーは“愛書”(1345)の著者であり<sup>2)</sup>、そして前者に対する後者の関係はスタインバーグ(Sigfrid Henry Steinberg, 1899—)によって‘最もすぐれた中世の先輩書’として両者の思想的関連性が付与されている<sup>3)</sup>。事実ノーデ自身もその“意見書”の中で、しばしばこの“愛書”とその著者のことに触れ、図書館存在の意義は、公衆の利用にささげることにある点を強調するに当ってド・ベリーの事績を回想し(第1章)、図書館創設の諸準備をすすめる上で貴重な示唆を与えてくれるすぐれた文献として“愛書”を推奨し(第2章)、蔵書に対する目録作成の重要性に関連しては、ド・ベリーがみずから作成したと伝えられる蔵書目録に言及し(第3章)、さらにド・ベリーによって行なわれた積極的な図書収集の具体的な方法を要約・紹介する形で、“図書の獲得”とその実際について記述している(第5章)。

ツォラーによってこのような表現がなされている1848および1850年の時代は、シュレチンガー(Martin W. Schrettinger, 1772—1851)の創始にかかる“図書館学”の語がほぼ定着し<sup>4)</sup>、他方においては“ビブリオテコノミー”の語も同時に存在しており、ためにこの2つのことばを意識した上で、ノーデおよびド・ベリーの2人を回想し、それぞれの思想的位置づけを行なったものである。

2

ノーデの“意見書”についてはアメリカのジョンソン(Elmer D. Johnson, 1915—)も、‘図書館学に関する最も初期の文献の1つ’<sup>5)</sup>とし、パーカー(Ralph Halstead Parker, 1909—)もまた‘図書館学に関する最初の近代的著作’<sup>6)</sup>とみなしている。ともに図書館学(library science)の語を用いてその位置づけを行なっている点において、時代的には100年以上の隔りがあるとしても、ツォラーと同一の立場をとっている。ジョンソン、パーカーの2人はしかし、上述のことば以上には、特別の説明を加えていないが、ツォラーにおいては、彼の抛りどころとしている立場が比較的詳細に展開されている。すなわち彼によると、ノーデ以前の人々による図書館論(Bibliotheklehre)には、内容を部門に分け、それらを確固とした体系的順序のもとで論じようとしたものがないのに対してノーデの“意見書”は、章を分けて9個の主要課題に注視し、総括的かつ鮮明に、それらの課題がもつ重要性に言及している点をとくにかかげている<sup>7)</sup>。内容的に言えば図書館存在の意義・図書館設立に必要な諸準備・蔵書の数量ならびにその価値・図書の選択・図

書の獲得・図書館の建設とその場所・図書の配置・装美と装飾・図書館の目的の9項目である。そしてこれら9章の各々について順を追ってその内容に触れて行ったあと、ノーデに引きつづいて、図書館に関連する諸問題を分析し考察を加えた人々、すなわちクレマン (Claude Clément) からエルト (P. Erdt) に至る時代を経て、結局はシュレチンガーの時代へと連なり、彼によって始めて図書館学を組織的に取り扱う課題が採り上げられたとして、1808年その第1・2分冊が刊行された“図書館学全教程試論”は、そうした意味での最初の試みであり、そして始めてのものとしては、その可能な限りにおいてこの課題に答え、かつそれを満したものであるとして、その間における一連の系譜を跡づけている。

クレマンはフランス生まれのヤソ会士であるが、1635年すなわちノーデの“意見書”が出版されてから8年後、図書館の構成について概括した“博物館もしくは図書館について”を著わしている<sup>8)</sup>。ツォラーはこの書について、細目中には数多く異質のものも含めてはいるが、図書館学の内容とすべきものをきわめて正確に、建築 (exstructio)・配備 (instructio)・管理 (cura)・利用 (usus) という4つの主要部分に分けて叙述している点を高く評価している<sup>9)</sup>。そしてこのクレマンの著述から151年、1786年エルトがアウグスブルグ (Augusburg) で出版した“新人図書館員のための入門書” (*Die Anleitung für angehende Bibliothekare*) は、図書館一般・図書館員・図書館の整備・目録類・図書館員と図書館の5章をもってその内容とし、あらゆる側面から図書館そのものについて言及したこれが最初の文献であるとの評言を加えている<sup>10)</sup>。シュレチンガーの“試論”が出版される22年前のことであり、このようにしてノーデにより、図書館に関する本質的課題を総括的にとり上げる努力がなされてから、彼に引きつづき、そしてシュレチンガーの直前の時期に至るまで、この課題を追求する努力がいろいろ

に積み重ねられてきた足跡をたずね、ノーデは図書館に関する重要課題の総体的分析への端緒を切り拓いた人として、またシュレチンガーは“学”の名において、その体系的総括化を企図した最初の人物として、それぞれの位置づけと歴史的関連性を付与している。

## 3

このシュレチンガーは当時一般に行なわれていた図書館の概念にこだわることなく、新たな観点からそれを捉え直し、その上に立って図書館学の概念を展開した最初の人物であった。しかしながらツォラー自身は、エーベルト (Friedrich Adolf Ebert, 1791—1834) によってさらに展開されたいわゆる“エーベルト組織法” (Eberts Systematik)、すなわち図書館学はシュレチンガーの設定した整備学 (Einrichtungskunde) に、さらに管理学 (Verwaltungskunde) が加った2つの領域をもって構成されるとの立場に拠っており、そのため1823年エーベルトがこの新たな考え方を展開した一文“図書館学” (Bibliothekswissenschaft)<sup>11)</sup>をもって、“すばらしい論稿” (vortrefflicher Aufsatz) として賞賛するとともに、この論稿によって‘われわれの学問の区分原則が最も明るい光の中に置かれ、またその上に立って、単純・明白な体系が組み立てられた’とのべている<sup>12)</sup>。すなわち包括領域に関する限りでは、シュレチンガーとその立場を異にし、それを一面的なもののみならずはいるものの、問題を組織的に取り扱い、1つの体系を企図し、一応その課題をみたした最初の人物としての高い評価を加えているのである。すなわちツォラーにとっても図書館学はあくまでも経験的なもの、したがって‘いろいろな図書館の実際から得られた経験を基にした諸原則の総括’<sup>13)</sup>であり、経験から原則を求め、それらを総括して行く態度においてシュレチンガーと特に異なったところはなく、シュレチンガーの“試論”に対し、‘すぐれた体系的整序を認める点においてはいささか

もちゅうちょするものではない’とのべ、それに“理論的・実體的体系”(theoretisch-praktisches System)の語を付与している<sup>14)</sup>。要するに両者間の相違点は、包括領域における広狭に外ならないが、この問題はドイツ図書館学者たち(Bibliothekologe)がその後不断に対象としてきた課題であり、結果的には次第次第により広い領域を包括して行く過程をたどって現在におよんでいる<sup>15)</sup>。すなわち1928年のいわゆる“ライディングの提言”(Vortrag Leidingers)に基づく図書館学における“四重性”(図書学・書誌学・図書館史・図書館管理学)が、ある程度の一般的承認を得たのは、フックス(Hermann Fuchs, 1894—)ものべているように、当時としてはその包括範囲における最大限の拡大を意味するものであった<sup>16)</sup>。しかしながらさらに近年においては、情報(Information)およびドキュメンテーション(Dokumentation)をそれに追加した形でのより広大な領域が採り上げられている<sup>17)</sup>。おそらく今後においても新しい学問分野の開発に伴って、なおさらにそれらの分野をも含めた拡大解釈が採択されて行く方向性をたどるであろうし、領域論に立つ限り図書館学の対象領域は無限に拡大されて行く可能性をはらんでいる。

ツォラーのいう図書館学、ひいては19世紀の前半において一応の形成をみた図書館学は、このような拡大過程の中においては、シュレチンガーのそれを起点としての最初の発展段階であり、しぜん現在においては、その中での小さな部分とみなされているものであるが、しかしフックスによっては、この分野こそ、“図書館学の本質的な核”(eigentlicher Kern der Bibliothekswissenschaft)として位置づけられている<sup>18)</sup>。今日エーベルトが図書館学の建設者の中においても、最も特筆すべき人物として回想されるのは<sup>19)</sup>、この本質的な部分をもって、図書館学の対象領域として設定した最初の人物であったことによるものであり、ツォラーはそれの祖述者、さらにその思想を展開した人であっ

た。要するにシュレチンガーに連なる思想的関連においてノーデは、たとえ図書館学の語を用いなかったとしても、図書館学思想の発生につちかい、その基盤を敷設した最初の人物として回想されているのである。

一方またド・ベリの“愛書”は、ノーデの“意見書”の公刊より282年前の1345年の著作であり、活字印刷がまだ行なわれていなかったために、長く写本のままで伝えられ、128年後の1473年ケルン(Köln)において始めて印刷に付されたが、ドイツにおいては18世紀の終り、シェルホルン(Johann Georg Schelhorn, 1733—1802)がその著“図書館員と文書館員のための入門書”(Anleitung für Bibliothekare und Archivare, 1788—1791)の中で指摘して以来、図書館の価値とその整理について論じた文献の中では、この“愛書”が最も古く、しかも賞賛すべきものとしてその地位を保っていたものであった<sup>20)</sup>。そしてツォラーはこの書を構成している20章のうち、第1章から16章までは愛書家(Bibliophile)に対するもの、最後の3章は図書館員(Bibliothekar)にとって関心の深いものとして一応の区別を行なっているが、直接その内容に言及しているのは第17～19章の3章である。そのうち第17章は、書物に対する注意深い取り扱い、その確実な保存の必要性についてのべ、第18章は、イギリスにおける最初の集書家としてのド・ベリの集書行為に向けられた“悪意ある中傷”に対して、その真実の企図を開陳したもので、第19章は、彼が究極の目的としていた母校オックスフォード大学内における会館の建設、そしてそこに蔵書のすべてを寄贈し、“寛大な利用”に供せんとするに当って、あらかじめ策定しておいた図書の貸し出し規則について、その詳細をのべたものである。実のところツォラーは、そのような会館と図書館とがすでに建設されていたと理解しており、ためにド・ベリをもって“オックスフォード図書館の創設者”(Stifter der Oxforder Bibliothek)とみなしているが<sup>21)</sup>、この貸し出し規則につい

ても、‘当時としてはきわめて自由’ (äusserst liberal) なものであった点を特に強調している。そして彼はこの書物の中に、非常に気高い書物愛、そして図書館そのものについてのきわめて深い理解が蔵せられている点を指摘して‘われわれは進んでこの著作に対し、ビブリオテクノミーの最初の基礎づけがなされたとの要求を行なわんとするものである’とのべている<sup>22)</sup>。すなわちこの著述が図書に対する深い愛情をもとに、その保全・収集・利用の3点について原則的なことに触れた最も古い文献として、これに“ビブリオテクノミー”の基盤設定の歴史的意義を付与し、図書館学思想の起点をここに求めようとするものである。

## 4

現にミズリー大学 (University of Missouri, Columbia) の図書館学部長である既述のパーカーは、“ライブラリー・サイエンス”と“ライブラリー・エコノミー”との関係について、まず“ライブラリー・サイエンス”を、‘図書館業務のあらゆる面を包含する学問領域’と定義したあと、この主題に対して最初に用いられた名称 (designation) が“ライブラリー・エコノミー”の語であったとして、それを“ライブラリー・サイエンス”に対する先行語として捉えている<sup>23)</sup>。たしかに英・米の場合、“サイエンス”に先立って“エコノミー”の語が使用されたことは事実である。しかしドイツの場合についていえば、“Bibliothekonomie”の語が“Bibliothekwissenschaft”の先行語であるとする訳には行かないであろう。すなわちこの国においては、1807年という早い時代に、“図書館学”の語がすでに用いられており、その翌年公刊されたシュレテンガーの“試論”はこの語をその標題に付した歴史上最初の文献であるが、“ビブリオテクノミー”の語をその標題とした初期の文献として採り上げられているルーデヴィッヒ (Hermann Ludewig) の“ビブリオエコノミーについて” (Zur Bibliothekono-

mie, Dresden)<sup>24)</sup>は1840年の出版であり、図書館学の語が用いられてからすでに30年以上を経過している。しかしこの書は内容的に言えば、目録作成の問題をその対象としたものであり、その目録もツォラー自身が“単一目録” (Monokatalog) と呼んでいるもの<sup>25)</sup>、すなわちある特定主題のもとに、単にその図書館が所蔵しているもののみに限らず、広く関係文献を収録した、むしろ主題書誌の形態をとるものについてであった。

しかしながら、“ライブラリー・エコノミー”に該当することばをいち早くその標題として出版した国はむしろフランスであろう。そしてこのことは今日フランス人が、独・英語における“ビブリオテクノミー”・“ライブラリー・エコノミー”の2つは、いずれも仏語の“ビブリオテクノミー” (bibliothéconomie) にその範をとり、またそれに追隨する形で使用するようになったと固く信じていることと無縁ではないであろう<sup>26)</sup>。すなわちコンスタンタン (Constantin) の別名をもってするエス (Leopold Auguste Constantin Hesse, 1779—1844) の“ビブリオテクノミー” (Bibliothéconomie)<sup>27)</sup>であり、わずか132ページの小形本 (18 cm) ではあるが、1839年のものをその初版として、翌年 (1840) には再版が、ついで翌々年 (1841) には改訂・増補を行ない、挿図・図表を加え、さらに小形 (15 cm) のものながら約2倍の紙数 (266ページ) をもつ新版が同じくパリにおいて公刊されている<sup>28)</sup>。そしてこの書物をいち早くとり上げて紹介し、また自国語に翻訳した国はドイツであった。すなわちこの書の初版が刊行された1839年、“ライプツヒヒ 図書新聞”<sup>29)</sup>を通じて内容の一部が紹介されたのに引きつづいて種々の書評がなされているが、1840年にはすでに独語に翻訳されてライプツヒヒで公刊され (1842年に再版) ている<sup>30)</sup>。そしてこの独訳については、ヒダルゴ (Dionisio Hidalgo) による西語訳が1864年に<sup>31)</sup>、またマクレイ (John Macray) による英語訳が1870年にそ

れぞれ行なわれているが<sup>32)</sup>、米国議院図書館 (Library of Congress) が所蔵する英語訳は、タイプ印書をもってするものであり、その中には訳者の自筆書簡3通が挿入されているという。

ドイツにおけるこの書の受けとめ方としては、いち早く好意的な書評が2・3の人々によってなされた後に引きつづき、1841年にはペッツホルト (Julius Petzholdt, 1812—1891) によるきわめてきびしい批判が加えられている<sup>33)</sup>。すなわち彼はこの書の中に、‘多種多様の、しかも重要でないとはいえない欠点が見出される’として、“不備” (Unvollständigkeit)・“偏頗性” (Einseitigkeit) をするどく指摘し、当時のドイツからみれば、‘きわめて不十分な書物’、したがって不必要な書物であるとしているのみならず、“エスの駄作” (das Constan'sche Machwerk) とまで極言している。

以上のようにドイツではこの書物に対しては当初から、相対立する評価がなされてきたが、図書館学の語がほぼ定着した時期において、新たな“ビブリオテコノミー”の語をもってするこの著作は、この語に対する人々の関心を喚び起こす上に大きな影響を与えたであろう。またこの書の内容は、副標題によって示されている通り、図書館の整理 (arrangement)・保存 (conservation)・管理 (administration) をその対象としたものであるが、実際には、1) 書誌学 2) 図書館一般 3) 蔵書癖 4) 図書館員一般 5) 図書館組織 6) 図書の保管 7) 図書館建築・設備 8) 管理組織 9) 図書館規則 10) 目録の10項目に分けて叙述されている<sup>34)</sup>。そしてツォラーにおけるこの著作の受けとめ方は、ペッツホルトによる上述のごとき批判を、‘余りにも手きびしいもの’ (zu bitter) としながらも、ペッツホルトと同じくこの書が、ドイツにおける諸業績・関係文献に無関心・無知のまま、それらを全く利用していない事実を指摘するとともに、例えば書誌学 (Bibliographie) ならびに蔵書癖 (Bibliomanie) のごとき、‘本来

的には図書館学に所属すべきではないもの’を採り上げていること、さらにはまた一見してこの書の部門配置は非論理的であり、到底1つの標題のもとに包括し得る性格のものではなく、また各項目相互間の結びつきも問題とされており、要するに著者自身この書物に対し、‘論理的整序の精神’ (logisch ordnender Geist) を少しも求めていないとのべて、組織的体系・論理的精神の欠如を指摘している<sup>35)</sup>。

このようにドイツの場合、図書館学の語はむしろ“ビブリオテコノミー”の語に先立ってすでに使用されており、したがって両者の関係は英・米の場合と異なっているが、ドイツにおける図書館学の語はその当初から、“総体” (Inbegriff)・“総括” (Zusammenstellung) の概念によって貫ぬかれている。すなわちシュレチンガーにおいては、‘図書館の合目的な整備に必要なあらゆる命題の総体’であり、エーベルトにおいても、‘司書業務に必要とされる知識と熟練の総体’、さらにツォラーにあっては、すでに引用した意味における“総括”であった。したがってツォラーがノーデに対して図書館学の建設者という表現をとったのは、ノーデが‘なぜ図書館はつくられるのか?’ (第1章) という課題を最初にかかげて図書館存在の意義から筆を起し、すぐれた図書館を築き上げて行く上の重要な課題を摘出して、それらの全体像を描き出した最初の人物であったとみなしているためである。

このようなノーデに対する位置づけとともに、ド・ベリに対しては、“ビブリオテコノミー”の最初の基礎づけを行なった人としての表現を付与していることについてツォラーは、“ビブリオテコノミー”の語に対して特別の概念規定を行なっている訳ではないが、図書館学の語に対比してそれは、とくに学問的体系を志向したものではなく、したがって“総体”・“総括”を企図しない形で、図書館の整備、すぐれた管理・運営に関する課題を対象としたものに対し、この語を使用したとみるべきであろう。

## 5

しかしながらツォラーにおけるこのような理解は、必ずしもそのままの形で後の人々に受けつがれて行ったとは言えない。グレーゼル (Arnim Graesel, 1894—1917) はツォラーよりほぼ1世代のちの人であるが、彼はエーベルトからツォラーに至る従前の図書館学を“Bibliothekslehre”という新しいことばに置きかえ、それと全く同等の部分に分ち合うものとしての“Bibliothekskunde”を設定し、この2つをもって図書館学は構成されるべきであると主張した人であった。そして前者は図書館学における先験的 (aprioristisch) な部分、すなわちどの図書館においても普遍的に課題とされる総括的な観察部門であり、後者は逆に経験的 (empirisch)、したがって歴史的 (historisch)、すなわち新・旧図書館の個々について、その歴史および現状を叙述して行く部分であるとしているが、この立場において彼はツォラーにおける図書館学は、彼自身が主張している“Bibliothekslehre”と、‘本質的に一致’するものであるといい、しかしこの分野は人により、“図書館技術” (Bibliothekstechnik)、あるいは“ビブリオテコノミー”などとも呼ばれてきたものであったことを付記している<sup>36)</sup>。すなわちツォラーなどがきわめて厳密な立場をもって、図書館学と“ビブリオテコノミー”の2つを、特に対象把握の基本的立場の相違によって区別していたのに対して、一般的にはそうした立場とは無関係に、ただその領域のみによってその2つを区別して呼ぶようになった事情を想察することができる。そしてグレーゼル自身もその例外でなかったことを意味する。

このグレーゼルにおける“Bibliothekslehre”は、内容的にいえば図書館の建築・職員・資金の問題と、蔵書の整備・増強・利用の問題との2の部分に大別されるものであるが、1890年ライプツヒにおいて刊行され、単にドイツのみならず、国際的にも高い声誉を得たその著“図

書館論綱要” (Grundzüge der Bibliothekslehre...) が仏訳されて、1897年パリにおいて刊行されたとき、その標題として付されたのは“Manuel de Bibliothéconomie”であり、すなわち“Bibliothekslehre”はそのまま“Bibliothéconomie”の語におきかえられ、ただ仏語としての体裁を整える必要上、1つのアクサン・テギュを付しただけにとどめている<sup>37)</sup>。そしてこの仏語訳は、その副標題に示されている通り、グレーゼル自身が直接目を通し、しかも相当量の増補を行なって成ったもの、したがっていわば彼自身による仏語をもってする改訂版としての性格をもつものであった。なおこの仏語訳に先立って1893年にはすでに伊訳本がトリノ (Torino) において公刊されているが、このとき採択された書名も“Manuale di Biblioteconomia”であった<sup>38)</sup>。結局グレーゼルにとっては、彼がベッツホルトの構想を受けて展開し、図書館学の一半をなすものとして設定した“Bibliothekslehre”は、そのまま“ビブリオテコノミー”のことばに置きかえ得る部分であったことをこれらの事情は物語っている。

またフックスは、1928年におけるいわゆる“ライディンガーの提言”とそれに基づく図書館学の四重性に言及したあと、その中の“図書館管理論” (Bibliotheksverwaltungslehre) をもって図書館学の本質的な核を成すものとし、内容的にはグレーゼルが“図書館論提要” (Handbuch der Bibliothekslehre, Lpz., 1902) において取り扱ったのと同じものを掲げているが、ライディンガーによってこの新しい用語が提案されたことによって、この領域に対して従前使用されてきた“Bibliothekslehre”ならびに“Bibliothéconomie”の語は、その地位を保ち得ないものになってしまったとのべている<sup>39)</sup>。もちろん現実においては、フックスのこのようなことばとは逆に、ライディンガーによる新用語は、その長い綴字の故か、これを使用している事例はきわめてまれであり、“Bibliothekslehre”の方が一般的であるが、フックス

においても“ビブリオテコノミー”は“ビブリオテークスレーレ”と同一であり、結局は“ビブリオテークスフェルヴァルテュンクスレーレ”に帰一したものとみなされている。

現にフンボルト大学 (Humboldt-Universität, Ostberlin) の教授であり、同時に国立図書館長(東独)でもあるクンツェ (Horst Kunze, 1909—) は、19世紀の初期に発展を遂げた図書館学 (bibliothecal science) は、現代の図書館学と全く同一のものであるという訳ではなく、明らかにそれは、“図書館行政” (library administration) ・“ライブラリー・エコノミー”・“ビブリオテコノミー”, さらに“ビブリオテークスレーレ”などと呼んでいる領域部分に限定されたものであったとのべている<sup>40)</sup>。ここで彼は“現代の図書館学”と呼んでいることばの内容には触れていないが、いずれにしても彼はデュルチナ (Jaroslav Dřitina, 1908—1968) 亡きあと、社会主義図書館学 (sozialistische Bibliothekswissenschaft) を代表する人物 (Hauptvertreter) である<sup>41)</sup>。そしてまたいち早く (1953) 学術図書館におけるドキュメンテーションの不可欠な発展について言及した人でもあった<sup>42)</sup>。したがって彼のいう図書館学は、社会主義の立場に立ち、領域的にはドキュメンテーションなども含む広範なものとみなすべきであろうが、領域論に立つ限り、19世紀初期に形成への道をたどった図書館学は、ペッツホルトにおける“ビブリオテークスレーレ”, ついでグレーゼルの“ビブリオテークスレーレ”さらにライディンガーのいう“ビブリオテークスフェルヴァルテュンクスレーレ”と同一であるとみなすものである。すなわちそれ自体をもって図書館学の対象領域とするにはその範囲において狭域にすぎるとしているばかりではなく、さらにはドイツにおける“ビブリオテコノミー”, 英米での“ライブラリー・エコノミー”とも同一の領域を分ち合うものであると解している。ここに至ってはすでに、シュレチンガーをその起点とし、19世紀の前半において一

応の定着をみた図書館学も、領域論の立場をもって、結局は“ビブリオテコノミー”ならびに“ライブラリー・エコノミー”と同じ概念のもとで捉えられている。そしてこのこと自体また、一連の思想的系譜に連なるものであるが、それはシュレチンガーが、‘厳格な意味における図書館学の理念’ (Idee einer Bibliothekswissenschaft im strengen Sinne)<sup>43)</sup> ということばを用い、図書に関する知識さえもこの理念の圏外に置いて、その領域を究極的なところまで限定した立場とはむしろ逆の方向をたどるものとなった。現にブレーメン (Bremen) の大学図書館長であるクルート (Rolf Kluth, 1914—) は、過去ドイツにおいて、図書館学発展のためになされてきたあらゆる試みも、結局は座礁 (scheitern) せざるを得なかったとのべて、発展の道をコミュニケーション科学 (Kommunikationswissenschaft) の概念とコミュニケーション諸科学の体系 (System) との成立に求めようとしているのは<sup>44)</sup>、無限に拡大されて行く可能性をはらむ領域論の限界に触れたものというべきであろう。(本学部教授)

注

- 1) Zoller, E.: Bibliothekswissenschaft. *Serapeum* : Jg. 9 (1948), S. 134; Jg. 11 (1850), S. 126—127.
- 2) ノーデおよびド・ベリの著書ならびにその思想については、下記拙稿を参照。  
「図書館学思想の発生基盤 —Gabriel Naudé の思想を中心として—」(京都大学教育学部紀要第18号 昭和47年3月)  
「図書館学思想の起点 —Richard de Bury の思想を中心として—」(京都大学教育学部紀要第20号 昭和49年3月)
- 3) Steinberg, S. H.: Five hundred years of printing, 1959, p. 181.
- 4) シュレチンガーに関しては下記拙稿を参照。  
「マルチン・シュレチンガーにおける図書館学の構想」(京都大学教育学部紀要第21号 昭和50年3月)
- 5) Johnson, E. D.: Communication, 3rd ed., 1966, p. 87.
- 6) Parker, R. H.: Library Science. *The New Encyclopaedia Britannica in 30 Volumes. Macropaedia volume 10*, 1974, p. 867.
- 7) Zoller, E.: *op. cit.* *Serapeum* Jg. 9 (1848), S. 134.

- 8) Clemen or Clemens, Claude : *Musei sive bibliothecae tam privatae quam publicae exstructio, instructio, cura, usus...*, 1635 (traité de l'organisation d'une bibliothèque, avec la description de celle de l'Escurial). *Dictionnaire de Biographie Française*, 1959, Tome 8.
- 9) Zoller, E.: *op. cit. Serapeum Jg. 9* (1848), S. 134.
- 10) *Ibid.*
- 11) Ebert, F.: *Bibliothekwissenschaft. Allgemeine Encyclopädie der Wissenschaften und Künste in alphabetischer Folge von genannten Schriftstellern bearbeitet und herausgegeben von J. S. Ersch und J. G. Gruber. Zehnter Theil. 1823*, S. 69—73.
- 12) Zoller, E.: *op. cit. Serapeum Jg. 9* (1848), S. 134.
- 13) *Ibid.*, S. 132.
- 14) *Ibid.*, S. 268—269.
- 15) ドイツにおける図書館学思想の拡大形成過程については下記拙稿を参照。  
「ドイツにおける図書館学思想の形成とその起原」(図書館界第23巻第3号 昭和46年9月)
- 16) Fuchs, H.: *Bibliotheksverwaltung. 2., verbesserte und vermehrte Aufl.*, 1968, S. 5.
- 17) Meyers Enzyklopädisches Lexikon in 25 Bänden, 1972. Bd. 4. *Bibliothekswissenschaft*.
- 18) Fuchs, H.: *op. cit.*, S. 6.
- 19) Meyers Neues Lexikon, 2te, völlig neu erarbeitete Auflage in achtzehn Bänden. 1972. Bd. 2. *Bibliothekswissenschaft*.
- 20) Graesel, Arnim: *Handbuch der Bibliothekslehre. 2te Aufl.* 1902, S. 38.
- 21) Zoller, E.: *op. cit. Serapeum*, Jg. 11 (1850), S. 128.
- 22) *Ibid.*, S. 126—127.
- 23) Parker, R. H.: *Ibid.*
- 24) Zoller, E.: *op. cit. Serapeum*, Jg. 9 (1848), S. 271; Graesel, A.: *Ibid.*, S. 224.
- 25) *Ibid.*
- 26) 昭和50年10月14日, パリ行政図書館長ミシュール・ルシェ氏 (Michel Roussier, Conservateur en Chef de la Bibliothèque Administrativ de la Préfecture de la Seine) は, 関西日仏学館での会合で筆者にこのことを語ったが, またフランスではその創始から一貫して“bibliothéconomie”の語のみが用いられており, “ヴィッセンシャフト”や“サイエンス”に該当する“science”に図書館の語を結びつけた形の“図書館学”の語を使用することなく今日に及んでいるという。
- 27) Hesse, L. A. C.: *Bibliothéconomie. Instructions sur l'arrangement, la conservation et l'administration des bibliothèques*, Paris, 1839.
- 28) Hesse, L. A. C.: *Bibliothéconomie, ou Nouveau manuel complet pour l'arrangement, la conservation et l'administration des bibliothèques*, Paris, 1841 (*L. C. Card*).
- 29) *Leipziger Allgemeine Zeitung für Buchhandel und Bücherkunde*, Jahrg. II, 1839, Num. 47. 52. 58. 59. 61. 62. 128.
- 30) *Bibliothéconomie oder Lehre von Anordnung, Bewahrung und Verwaltung der Bibliotheken*. Leipzig. 1840.
- 31) Graesel, A.: *op. cit.* S. 34 (Fußnote 2).
- 32) *Instructions for the arrangement, preservation and management of libraries*, by L. A. Constantin [*pseud.*] Tr. from the French of [i.e. by] John Macray, [Oxford?] 1870 (*L. C. Card*).
- 33) Petzholdt, J.: *Recension der: Bibliothéconomie von Constantin*. Von Bibliothekar Dr. Petzholdt in Dresden. *Serapeum*, Jg. 2 (1841), S. 59—63.
- 34) *Ibid.*, S. 60—61.
- 35) Zoller, E.: *op. cit. Serapeum. Jg. 9* (1848), S. 271.
- 36) Graesel, A.: *op. cit.*, S. 9.
- 37) *Manuel de Bibliothéconomie. Edition française revue par l'auteur et considerablement augmentée*. Paris, 1897.
- 38) *Manuale di Biblioteconomia*. Torino, 1893.
- 39) Fuchs, H.: *op. cit.*, S. 6.
- 40) Kunze, H.: *Of the professional image and the education of the librarian. Rawski, Conrad H., ed: Toward a theory of librarianship; paper in honor of Jesse Hawk Shera, Scarecrow, 1973*, p. 517. この論文はドイツ語で書かれたものを編者である Rawski が英訳して収載した旨記されている。しかし“bibliothecal science”の語が“Bibliothekswissenschaft”の訳語であることは前文で明らかである。
- 41) Meyers Neues Lexikon, 2., völlig neu erarbeitete Auflage in achtzehn Bänden, Lpz., 1972. Bd. 2. *Bibliothekswissenschaft*. なおこのクンツェと対照的に, フォルステイウス (Joris Vorstius, 1894—1964) をもって, “bürgerlich-fortschrittliche Bibliothekswissenschaft”の Hauptvertreter としている。
- 42) Reichardt, Günther: *Die Bedeutung der Annotation für Bibliographie und Katalog. Roloff, Heinrich, hrsg.: Bibliothek · Bibliothekar · Bibliothekswissenschaft; Festschrift Joris Vorstius zum 60. Geburtstag dargebracht. Lpz., 1954*, S. 105. なおこの論文集の中にはクンツェ自身の執筆になる下記の論文も収められている。  
*Bemerkungen zum Thema „Wissenschaftliche Bibliotheken und Dokumentation“.*



京都大学教育学部紀要 XXII

- 43) Schrettinger, M. W.: Versuch eines vollständigen Lehrbuchs der Bibliothek-Wissenschaft ; oder Anleitung zur vollkommenen Geschäftsführung eines Bibliothekars in wissenschaftlicher Form abgefasst. I Heft, V (*Vorrede*), 1808.
- 44) Kluth, R.: Grundriß der Bibliothekslehre, 1970, S. 5.